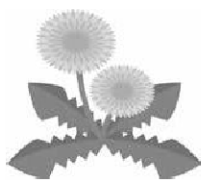


子供に自分の素晴らしさを 自覚させよう

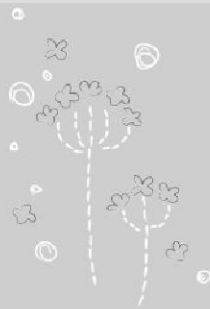
人間に宿る無限の力を子供に伝えよ

人間の内には実に無限の潜在能力が埋蔵されているのである。深く穿つにしたがってどれだけでも豊かにその潜在能力を掘り出すことができるのである。穿つとは自覚するということである。自覚しさえすれば埋蔵せる宝は常に掌中のものとなるのである。だから表面にある能力だけを自分の全部だと子供に思わすな。表面にある「自分」は「真の自分」のただの「小出し」にしかすぎないことを知らせよ。「小出し」は使うのに便利かもし



れないが、この「小出し」を自分の全部だと思ってしまう

つたならば大いなる発達は望めないのである。常に子供に教えて小成に安んずるなどいへ。小成は自分の「小出し」にすぎないこと、今ある彼の能力はすべて「小出し」にすぎないこと、「小出し」は決して誇るに足りないこと、つねに「小出し」に満足せず、本源、すなわち無限の潜在能力(神)より吸むように努力すること——常にかくのごとき真理を子供に解る言葉で教えるように心懸ければ、現在の自分に満足する子供の傲慢心は打ち砕かれ、驕傲は消滅せしめられ、永遠に能力の伸びる精神的基礎は築かれるのである。(頭注版「生命の真相」第14巻188頁)



人間の本性は尊いものである

幼き子供に対しては、「人間は神の子だ。子の顔が親の顔に似ているように、なんじの能力と性質とは神の姿に肖にせてつくられているのだ。神はこの世界の万物をつくられたのであって、人間は神の子として、神の無限に大きな能力のあとつぎに造られているのだ、だから神の子は神の子らしく生きねばならぬ。神から譲ゆずられている無限に大きな能力を発現しようと思わないものは、親からせつかく頂いた宝の庫くらを開かないで棄すててしまうものだ」こういう意味の話を時々言葉を変えて子供に話して聞かせることにして、人間の本性ほんせいの尊いこと、その潜在能力の無限であることを子供の心に吹き込むようにすればよいのである。すると、子供はしだいに「本当の自分」がいかに崇高けいごうく靈妙れいみょうなものであるかを知りはじめる。

(頭注版『生命の實相』第14巻189頁)



親は子供の将来を祝福する

「下手へただ」とか「悪い」とかいつて叱しかりつけて、児童の心に自己の悪い方面を印象せしめるような旧式の教育法は断然改めなければならぬのである。といつて、下手へたのまま「これでよい」と慢心まんしんせしめるような教育法も失敗だといわなければならないのである。「非常に上手じょうずにできたが、ここをもう少ししたらいつそうできばえがよくなるだろう。それごらん、こうなるだろう。今度はここをもう少し注意してやつてごらんなさい。きつとまだまだ上手じょうずになる。この子は少しでも善くない所はすぐ改める子だから、どれだけでも上手じょうずになる子だ。将来だけだけ天才になるか、わたしはお前を楽しみにしているのだ」こういうふうな言葉を使つて、善くないところを改善することに歓びを見出すような誘導法を用いるのが最もよいのである。常に子供を批評するときには、確定的な言葉で、彼の将来を祝福してやり、子供の

上達に親たちが望みをかけており、彼が上達することが真に親たちの喜びであることを、ハッキリと彼の心に感じられるようにしてやるがよいのである。子供は親に喜ばれることをどんなに喜ぶか・（中略）子供は親に喜ばれるためには、どんな辛い努力でも吝まないのである。「わたしが上手になっても誰も喜んでくれるものがない」——こう子供が思うようになっては、彼の進歩は行き止りである。（中略）ともかく、大人は、子供の学業や仕事に対して大いに喜んでやるのがよいのである。

（頭注版『生命の真相』第14巻190～192頁）

ほめ言葉が子供の善さを引き出す

いかに子供の現在の状態が賞めるに値しなくとも、「今に善くなる！」「きっと偉い人物になる！」こういうふうな漸進的進歩の暗示を与えるのに相応わしくないこととはないのである。そしてその暗示の力で、漸進的にその子供を良化してゆくことはわれわれの為しうる、いな



為さねばならない義務であるのだ。

遺伝が良くないといつて絶望するな。胎教を過つたといつて失望するな。人間はその最も深いところに実に根強く、神の子としての神性の遺伝をもっているのである。（中略）叱りと罵りと悪口との雑草を刈りとり、これに代うるに讃嘆と敬礼との声にてわれらの「神性の遺伝」に対して肥料を与える時どんなに子供の「神性」が強く萌え出るかは想像するに難くないであろう。いかに祖先の悪遺伝が強くとも、また今までに胎教がいかに失敗していても、幼時の教育の仕方一つで、かくのごとき雑草をまだ若葉のうちに刈りとることはなんの雑作もないことであるのである。病菌でも数少なければ繁殖しえないのである。病菌の数の少ないうちに、拮抗菌を培養してやれば病菌はみな雑作もなく死滅してしまふのである。悪しき遺伝を撲滅せしめる拮抗菌は「善き言葉」と適当な「讃嘆の声」である。「善き言葉」の多きほど、適当な「讃め言葉」の多きほど、悪しき遺伝は消滅しやすい。

（頭注版『生命の真相』第14巻194～195頁）